人世の天(アメ)のもとの地(ツチ)ひろくして中に直流の浸ぬる
ところ量りなき世なれども人物の四民豊(ユタカ)にして
往のいにしへの長く変ぬ気風のうし一人(ヒトリ)来りてこれを
治せしごとくなれば人民は大平日にて春風なりとぞ
し是異国より賜(タマハ)て神の慈視(ミナハシ)の恢(ヒロ)き恵(メグミ)の広(ヒロ)きを示す
六十余州武家のもとに六百年来頼朝卿父子三代
五代将軍尊氏卿十三世織田豊臣に至て大幾静(ツナウ)なる
七道(シチドウ)さかりく西四(ニシヨツ)を治(オサ)め東四(ヒガシヨツ)を鎮(シズメ)て南海に鯨吼(ホエ)山に
狄(エビス)なく三年とかからず世を見すまく仁義を器(ウツワ)
せんく威風強気を化して兄弟鉾(ホコ)楯(タテ)を捨て
るの書表紙の勝れる所を見て是已の欲する
私の天心に面目なる也愛に慶長一統の治天百有余

年四夷静ニ八蠻治テ四風豊ニ万民和キテ戸々ニ千秋
楽ヲ唱ヘ家々ニ富栄楽ヲ飽ニ天ニ稟ケ地ニ利セ
る 明君の神武聖文の徳澤寛仁大度ハ餘薫ナリ為ル
仰ヲ今茲一百年ハ祥忌ニ行テ也ニ天下万代の重宝ヲ
你の隨一ニ金銀ハ多義の者ニ与ヘ多ク
思ヒ為ベキ事ヲ為ス益世上淳素ニシテ万人堂ニ化ス
寄ん野叟 残口ハ主頼の貧窮婆婆塞の乞児ニ為テ閑
ナリセハ隠家ナリ恐ナカ君ノ万々歳を永万年ニ
仰事ヲ首ニ戴キ仕立て道ヲ楽老の身ニ任セ
らんハ書集ル塵芥ニ交ル神ヒ
投ヒ衆正直の頭を抽ま也ム
維時 正徳五年乙未卯月八日

似切安

和定 一瓢示

通鑑巻之一

神祇之巻 はるゝ〳〵思ひそめしる此

一はるゝ〳〵ひとりて仰ぐ日ハ大なるかとうと及ハ
とこ永滅ハ一の分智者ハすきたりとハ
唐ニよしかゝ年ニ和国の近道なる神を信ずるを
是ニの明らかなる者ハ一文不通ニして芳のすいう
天上のなりにて物ニ為ざ事ニ成ぬ
ここに正成すしなれ和漢の書三国の伝文事ハ万海ニ
牛ハ汗ク七善言ハ古人の糠粕なれ博識人の涎をなれ益
なれ為ル銘肩のもひ沈ん
かして求ひれ山の奥ハ人里小て又ハ人倫の道なれ何ぞ
ハ人の道のなりハ夫婦ニ為ル覚の仰ニ敬ま
法性の神ニ必ず則ち必実相陰陽不測ニして又皆天地の
敬ハ神ハ仏の姿也今世ニ稀ニ神仏ハ又世ハ生

れ給ふ事なれば造化の神と申すもなれば男女夫婦の情
を生ずるなり易の序の卦の傳に云天地有て而后男女生男
女生て而夫婦生ずと云ふ神と聖人と有ると雖も男女の始ら
ざる時ハ造化の妙ハなし夫合の情ハ人の作業なれば人道立ての
仏法神道老孔荘列也ともに夫婦を世の根源とされば乱の義
和也乱して一日も道なしと雖ども世界ハ亦
かく根本なる夫婦の乱れなるに成行ハ乱と成て治ハ
もと忠と絶なと出し其夫婦の情なるものいしかるに
て儀典なき業に成行を考るに萩原中将の人鏡録元隆の誰
所の上に書るなく神四ましまして神の御殿を作りて大きに和らく
和の字義志て異国の教を先とする大きに理に遠ふるなれ
神代なる式に兄弟さし合ひて教訓を奉れて和を出して夫婦
なり人生ハ三十代に成て此格に成り歴史に詳也されば空穂物
取の首原氏狭衣侍従業苑の物かたり男ハ女に女ハ男に
異ひ給へて一夜の契へとんぶし百年の命を物ハ人と生るなるハ
縁り和を以てんとなるに成て異国の禮を惰て節を用ひ事に成ふ
ハ礼なりと守て根本の和の道を失ふ唐と倭ハ和をそひ礼を行ひ
玉ふ神代の後なれば礼なくして和を失ひ人倫記に倫勝則離也樂
勝則流と礼の勝ハ和の外に離也樂の勝ハ礼の長なきを
流る也和を以て礼を行ひ礼を以て和を長して驚くことなきを道
の中と云へきに今此世の有様ハ礼計にして和なし根本
の夫婦しかるに父子間ハ君臣年なれば父家に男を程
に礼を以て節すべき筋なるに成ていしかるに成るを無さるを
なれば舎人の異ひを等に等なるハ礼なるに成和なる者
儀職なるまに物なるハ神代の徳化を明らかにして大きに和らぎ
域を出ずして治なるに教源の乱なる是を学ぶ和の国の孫な
ん乱なるに忘恭和の情仏風花月の楽外を志んこと本を忘

君子なり〜これより見て宮中の礼を倣て宮こを立給ふ
ひつかうの作り直しを造り宮と姓と号さるしの我り回のなりハし
其三年一文字のくりハ八雲の神詠こと夫婦和楽の源玄秘可見也
情なりて八相成道の化儀調ふと云ふ正恵院殿と夫を女を
随縁よりひれを化夫ハ随縁よ成入て夫女を先て仏を女来とやしと夫女
くり弗也ものくり今也神と天神極法ふして下界ふりて和ず天隙産神ハ
和光同塵とて法き元ちをやまりけ濁り入せりふを塵りあらるこハ中也
是と元を失ひるよハりと云れて仏と神と元也と根ハ陰陽の中
りりなるハの新和のかハ男女ひんの結ひ和りをこ面産りよせて
かの其の皮しきこと歌ふく光義老、陽と嫁侍言葉ゆりの主を産
歌ふ氏とかく花一宿伝子息と神代のをき結ふ表
中古の恋慕の滅亡浮て今和の歌ふ賤き思命をふらし家極西口
てと云て何ふと中の和りたよ明りんとを形ハのをなり

三 天地澤合中なの小芽苗りとりの神化生ふ実の親立ちを推て云高て答れるの

ふて虚空法界万物育生の元気也是を回常立尊と号ふ
神人畜草木変化万像の全神ふて中有常住の名宮也是ふり木火
土金水と五行ひれ青黄赤白黒乃五色ふ是ふ次化生の神乾道成て陽
男の形ふる坤道成て陰女の形ふれをいまを不具ふり両足ふて合神
れるふり、ふて其次ふ伊奘諾伊奘冊ふる化生て天の浮橋の上ふ廻合ふて
伊奘諾の曰我ふ一ふ雄の元陽の徐ふりと伊奘冊答て我ふ一ふ
雌の元陰の欠ふり赤土と男神宮ハ我徐ふり地を海の欠ふり赤土と合也
うんと足支婦混合也志ふる小女神先ふる唱て可英ふ男小道女と音立
ふふ男神不祥と忘ふりて再交合ふ後男神可英ふ女遇女と祝して
夫ふり一女三男を化生ふ陽陰て法化ハ天地の法也婚姻ふ交合ふ雪ふ云ふ神和ふり
女ひて蛭子海流ふ素盞雄ふる大国を領ふ国を領ふ国を領ふ
ふりうと思ふ人ふ志ふしハ国を志ふりなり其後姉の大神と誓約の中に
御子産生て天の忍穂耳の尊と申ふる是中神和ふれふりりこの生雲国
手摩鴻ふ姉て八股の大蛇を退治ふりて稲田姫を嫁ふ大ふ貴成

かゝる大己貴千々幡姫に心を運ひて思ひ通しける後素盞雄のよ
くまはりあるへてハ末の世まての情かけるとも終に幡姫を娵て一百八十神と
なりり瓊々杵の尊と申すハ天照大神の皇孫にて下界へ天降坐して日
のかみと参しめ給ふ御孫也天よりくたりせ給ひ折ふし木の花咲耶姫に一
夜の契を結ひ給ふ故に大土へくたり給ふ咲耶姫孕みひて尊の御子に
似ぬを疑ひ給ふハるけき恨つゝも一夜にて子孫のやとるハふしきと寄せ
咲耶姫誓をたて給ひて若此子君か子ならは火に合て焼せん君か子ならは焔にも
害はなし当に生れ候火の中に入りて悪なく出生たりの流に火
見の尊と申す成か
火々出見尊兄の鉤針を失ひ給ひを尋て海底に入給ふ竜王の娘豊
玉姫玉の井にて逢ひ給ひし二年か間り鸕鷀羽葺不合の尊を生せ給ふ
豊玉姫ハうぬやとより姿のわかれ竜の宮に帰り給ひて御妹の玉依
姫を幼子の撫育に添へ給ふ葺不合の尊のゆたかに八候子なり御添臥
の馴染なりて後に御二人の中に神武天皇生れ給ひ是天の神の七代也

地の神の五代にて人の皇の始めにて陰陽交合の歴をはしめ其中
天稚尊の下照姫にほされて芦原に長尻をさらしむかしに事を
名雉を殺して天津棠をうけ彼に怨を流しける猿田彦の伯の巷に岐
かると鈿女の神の尻目に眼勝負して天の御孫の御道を志へしむ
祇胡の恋の元根情の権輿なるへし

三

志んしんは是世の大和の国に年々夫婦の者に八千代をかけ給へ玉椿
かはらぬ色をたのしみあるふされとも其人夜ハ九れ共と言ひんへしと
評せし年々夫婦の者とハ五年も七年も寝居して夜ハ身をよする
から契まてむし出して夫婦として今ハ思ひのたへすあるに夜斗
事ひたる事なるハ此男ハなすもの国より士農工商日課の所作を
て親を養ひ妻子をたてんと志かるに夜く泊りにしを通ひて昼の勤
をみせさるハ親に対して不孝なるに妻子に情なしかゝる曲者を夫
なりとそ五常を契りんハうかりとあらさるにし神代の道なりハ常ならずせ
我身を養いれの人のいとなみにて衣食に限なかりせし其人をたすけ

ちかひし人ハ主の恩を受けて同し化人ハむきの義理たゞしきも一度
とんを並べて一夜の枕を二世かけて情ハ微塵も外の欲よ立
さかへもれし其人の心かはりて通ひ来るを待ちわびて年月の立を数へ
すりの人の欲よ於ハりハ言葉かはりしもことにてよ賢きこころんといひし夫婦
の言実にま故ふるは賤きも悪ものかり女の心のはかなさかふいかなる此
此も也志かなふ今時入舞ふ出く者ハ恩のたのみかはらぬ者のとし夫婦
をもわら数あるふハ物も得いされ衣金持て来る女房ハ夫を尻に敷き
家のまゝ往のまゝおもひまゝにてとられよわがまゝ勝手の日に下女に至りて八
算用して後見て女房持ハ世帯の様なれ遊出し女房ハ夫よ於いてきて
おれ甚かうかなすハ勝なれと口強よまかく是まで衣食住の事よ
かれ夫婦ハ陰陽の識をましつゝ世と人ふ言よ寒ても情の言ハえ兄さ
るも夫婦といへどもかりされを行ひたんたんの方便志かしもつて世のたね
なりと頭を撫り三論の風をきて子細らしく物かひう乱行まで
風なる何のなりとも立人よりの孝経ふて親のためにもならぬ

四 石川や瀬見の小川の清きに物あらふ女ありしよ鴨の羽の丹塗の矢流れ
来りて女の脛よ立て女のそれを持かへりて床に挿置て男子を生めり此女の爺なる
しるよしなり父母きいかりて其夫をたづね限りてとふ村中の若者
ことの内成ことにしくと集めて子三日三夜よ成ていたる所を来集て酒をもりし此
子に盃をとらせ父とおもふに盃させよとありしかハ此子軒をさして丹塗の矢よ盃を
与へしと神秘なれば白地よ良いかなるかや志らし此首ハ其ゆかりにて神と
現し丹塗の矢ハ松尾の明神娘ハ乳の宮其子を上賀茂の神に
なし

五 大和の石の上布留の社を剣の流て女の二布よ立て恥をぬくとて布
よ留るとハ書たるなり

六 日本武の尊の東よおもむき給ふよ女房の海にて浪の荒かりしに御舟
やうく尊と御命のきハと歎き給ふに立花姫身をすてに立天地
まちくへ海底よ飛入給ふよ風静よ浪をさまりて御舟恙なくわたりぬ
東の夷を平らげて都よ帰りたまふよ碓井の峠にて東をみかへり姫

乃ち弟代りに立ちて若し其妻を取りて東国をあつまとい
なり式尊は市長一丈ふりて力千人よりまさる勇猛強暴なるゆへ夷の威力
をふるひ仇敵の毒地を殺さるさるひなるゆへ情のいつくしみ殺らも
多の丸へ立花姫の身を捨て命ふかりうんなるめさしれ流るもれ殺す軍
旅のいつけなれ出れなけるひるふとかんの内よりくさひらの涙をもて
しんなまひきうの風俗なるなく武名を八列ふひ出るひて坂都へ
のりせるへ附しと山も上りうるは海
失ハを節ふかりの山弟操をれ山ふこと日本武とハはりてへ

七

允恭天皇ことはまる帝天下比類なうの時世のをさまり民
たふりて山恵のなりけ物ゆく茅山ん法ひ減ることふ人のをい
はきまるの大さなりう家ふ衣通姫とハ所忠恢姫の山妹まして
山髪のあてられうの山眉目うるはし軽和なる山海鮮婚成山ならら
風俗紅粉の赤をかけ白粉の白きを塵ハざる化粧月花とはるひ面
き極のいるなんハ膚の光山袍うとうらゆることて衣通姫とそ尊
なるされる皆人見るて養ひ国よ立まるうの恨ハなるハうるゆ
経年の元ふしなて獨居さるをいこれるいふ帝人ふれを通見
るひて物き中と成るへ姉の后とかるうせるすれるふはれき
なれるとと妹君さハはさ〜をそれるるるへ首といまと塔元る移る也
のん姉君姫ふ〜滅せるへハ帝彼山恵ふ元山気さしから夫と
紙ふよ紙ハせるへとふれさハ上ふて義理法るられん次第小沸く
かのさハ底るれ泥棒ういそく重くるへハられ間関法るく人の山為き
まするい物なて出るて去へしを山通の間遠よ成るる姫ハいるる其方
乃ものをなるく諫らゆ〜さるひ彩帯よ妹をへ出の系元滅しに
秋方まの来へき雲ゆさかたの蛛の物るまいう孫て志れ〜と
出なんふるう後帝いくるひ口市波立出るひなん姉妹さ食く
山二人芸るれひうをいうるかるとて其なりくのるて推るる
と南山るるや賤きもとさゆの姫よ出ひうロいやるさるき
よ似へとけする舞王乃織皇女英の二女を娘稚成し首ふ反へり七

許せ〳〵と首の恋の誠和して流うれ給ひ神代の遺風とぞ伝へ給
仰て玉津嶋の神霊ひろの宮〳〵来の身不帰を哀れ給へ〳〵と心の内き
男女の中とハ我万代と忘眼まうん五器皿や抜て角月とうんハ給へ
て今て神慮を合ちまつる人き色こそハ一端の袖ふれ別ちきんのそけさ
らん十人の妻百人の心性直とそいそ〳〵ふるしの行ちいかん
今時の人のん為ふれ色よりさし浮気の熱よりも我して底んうれ
泥よ云ひ出ちまつき相合をたて口説よ女の為魂成ハもとる方ちし
う〳〵風羽と来て来ちゆ中ふうう〳〵ちひきぬ袖の恋〳〵ゆをうみ
てしれをうるいきうれ女ちて男の方よハ本しう南殿の中矢ちん病
ん〳〵きとそ袖しこと又女の方よう仕ケ〳〵う恋と男れきて不長ひ
ちて泉のうれのうくちれん男の水ちくうちうれ口〳〵ちう
くこちうらん内よ又深くそ負ちるん長後れよ別袖くちの色
又男と女とちう〳〵分道ちう袖よ行ちて男ちとちの中ひきれとなつ
うちくて生涯別ちれ袖とちと又ゆれうこうれて〳〵れうしまう白く

ちう屋〳〵ちう袖ちうちて〳〵成ちとんの女ハ神木ち行歩後
の恨と出ちと又同穴の言を身ちて去ちまよ拾ぬ去ちまちの方
九神の木ち行方の神ちとハかちう男ひちうを君伴と言て
ちのいうさ明れちう行ぬんう男ち脇ん長本宗ちくいて塔
ちれ胸の内ちう思祝〳〵と云ひ捨ちて神の様を軽ちうれ
ん男ち神小ちてハ不便よ行ちの角ちんをひるひ〳〵ちん偕老
の契とちて〳〵ちう女の方小不義ちんハ公ち祈〳〵貴を孫ちの後ち
ち女ハ夫の世ちう代神ちてハ後の行れ〳〵ちん魂ちう灯ち明
ちの火ちう車ち牛の時後道よ後ちん〳〵ち又拾ひ行れ物ちう出や

八

中し〳〵同者の為ち恐れちう男子ち行ちうれ〳〵ちの代の風俗
ち後ものく何和中ちう雅風てんう後の女の〳〵ひの〳〵ちう〳〵ちう
年と共ち云ちて〳〵ちて〳〵ちう宮の元ひつ〳〵孫〳〵〳〵ちう〳〵ちう
ハ〳〵ちう〳〵ちの陳ち長侍の年の恨いまく定ち云不とちて下潮の元
ん八後宮ちあ行ちあれとて〳〵ちひちう胸ちう〳〵ち後天千実の塩冷

の近きより侍る程男ひとりある者なりけるを今ハ一向
玄番の殿ばかりの細布と結句ハ猶ふさかりて物の食事も絶て
成しかハ乳母の女房更脈を問落涙さかりなれんよハ為ぞ雲井
の月ハ隔てとゝひふそかはしてハ墨染の筆際て老波ちれ猶を
こゝろ地を秋の件ありまゝ世ハ折れもあふ口伝えんとすれとも
ふるを母と乳して法と落くと思ふ心ハ思ふくる
通ハ世乞なんかすり男とぬかり成得ふ恨さ此の稚をれかの
きてなひくハうれ過事なれる女ハ瓜琴の上ハ想夫恋を弾ん
人男ハ竹の笛音ふ玄蕃流なりとしてなひの息を篠越よりう伴
して為ひる志ハ後ハ同とゝく父母ハ図て他合しを嫁なれん
結ひとゝろんよりふひ合ゝこと幸なん雷ゝこと同寄ゝ思て
志ハ色せるの柳ふ心ひ合ハれつ結ひ下紐とゝるを志を
あなれまてよ酒ひいちれ逆とゝ
をうけなるあをいこゝて為ひる化粧ハなるき志ハふ波男

南ふ十六歳の春なりしかハ行綾て姉君ふ行給て一年経りをう
なるいけるとゝ女の事合ハ逆れるこの恨ふ男離しなりけ
らしく殿様と今相まて内ふらるくいとゝこの恨しをとゝ水月鏡ふ
の物語ふ成ふ心根とせんなて行ふ物語の海ふ細ふて波男ふ
合ハ不女ふ成れ行ふ波しをりれハれて私語ふ又男の方ふと偽の
奴ふ成れ行ふ恨ふ思ふ恨ふ三寄ふ男を見合と恨ふ男と恨ふ月ふ行ふと
思ハ女ハとゝうれん今れてうこれ及歌ふ新さしるのうハしさ中ゝ同及ふ物の
数なりふ一度と誰袖恨れとゝとゝ殿ふ其これりさいとゝうれて
行ふ指合思ふ乞れんれ行ふ行ふ恨ふ為ふ恨ふ逆ふ高ふ内し
ます君ふいとゝう新ふ波ふ世ふ恨ふ今日ふとゝ為ふ神のひを恨た
しふ恨ふ行ふふへれ人の庵ふ住ひ尼ふとゝ恨と
らとふ稲舟の否なれ中ふ恨の恨ふの庵ふ遠立て行て持とゝる
酒箭ふ行ふ呑ふ下ふ事と酒ふ恨ふの今ひふ逆

とのるに蓋かてしいうけりあり宴盛ゑ呂律ともたれたるや斎藤樣ふ
なきぬ庵の主と物仕ふて屏風志いらい窓さして打しゆ体ことゝ間
千れ此州て其座をえ申しける娘か袖引枕二つよ寝をまえれさ定目
なきまおあしたかいの龍穴よ此新とらんしえ偖て一向いのらハう山家の
ますりハひとろ穴ふと深き契りと成よるり枕より外ふハ与ちらと打よ
細云きと壁の耳ちら安れ七あて岩の口やふいとすりとかり此娘よ知れ
たり此様ハかとけれハ七岩橋の夜の通ひもなりし也色やかれん角やさ
あかせりかりしと烏鳴さん気よ兆あて辻占とかせり無の無益ゑてんれと流れせ
しふ臣已不得をすせしいも訝る篝火の臣よいそそりくすりよ流きて
の女と法界悋気か念已乳母か藁をきれ吹流あるよ引提の水ハ浅た
ひり玉霰る計り涌ろいとしき山か倒き足ハ跡ハ池とせれ海ことなれかり
みの谷の深きをハ云ひあてせん今の間とかゆりてえ無かりり気色変
して本弘山り山河を旧法の川流よ浸りひぶりくて一七夜丹誠あき
思と成ゑの黒髪か二つ文字牛の角文字角立て夜かり文字よ成よ婦ち々
念の一字を去迹ふうさてなりや重々きとと従弟沐第七未葉迄七代子孫
をうらみの怨執を残りて宇治の橋姫と成りとかや
今とさ里の妓へ格子に浴らぬハさ柾の姫の余毒をうけりと号
評ありき面白逆則是須悪よ強ちれハ岩よ流はし是ならものんなりて
ハ神よハ無かへりす末の世まれかくのすなはすらかハりん女ハ祈て夫
しを得てし去ゆりし夫をとれりし大切よせいふんりてハ頼ともの一生
姿をふうじハりなりしん此処の神の子よもしりん昊山長嘯子の詠よ
こゝろとも有うん人のうれ魂やおんハいか蠢となりりん
一生文字もて志を遂する志なりと成て物のむなしき損をおもんと乞毒
是をなすよいりもる稼業なれき臺よ積て枝露出る桜の花もゆされ
ハとて人中ふ元派清出る柾の恩を作らすも仁義の賢人風流足
なよれ珠数を採人の目をぬき耳をうかり生涯を果さハ未来
ハかの野槌とかりうふ物よ生れ見物の目とむりく聞法の耳もなく口ハりき
ておりなる縁物腹中よ延折て蟻螻のもりとのとや成ゆりん

九

清原の俊蔭唐に使して観世音の慈眼にあつて世にめづらしき琴を
得て和朝にかへり今は数の年代たちて我娘のいとけなきに伝へ山深く
隠居して貧窮世の便もなく[illegible]極まり絶なんとおもひきり
しかどもいつしか娘の長成て[illegible]嵐なる小大内の人にも[illegible]
さるはなりしすてられたる父の伝へし一曲のなからにかなしきたる器の故か月
まなこいは花に対して血も琴なりしかる音絶まれ形容足をそろへ[illegible]
耳を傾まは感涙たれて袂をひたす古の伯牙が調は子期の行て音絶知
たるに式治の琴はいかなる山賊と耳まさに[illegible]て身に侍るものとさとる
も斗きれど風なきこの方より俊蔭にかへしいかでも人[illegible]とおもふても俊
蔭いくしは娘かまは天道に[illegible]なる天の掟行て回世と掟なくはいか
なる山賊の子なりと癡合かして[illegible]の使ゑの御使なく[illegible]いひ来る今
聞しこそ入たる所にて娘をとかく制して逃るとさなさし謀へて父母
なくなりし娘ひとり[illegible]宿にかさぬしく[illegible]まかりしを年人な
らぬ[illegible]や装束の綺羅は[illegible]いに居れたるとも眉目容はてりかゞやき

て[illegible]の[illegible]太政大臣の賀茂詣[illegible]次第成[illegible]出
座に立休らいあかりに垣[illegible]の中[illegible]に彼娘の立寄りて[illegible]
なかぬ[illegible]風の[illegible]身に[illegible]て今日の日の[illegible]待て人[illegible]
またの[illegible]ねと[illegible]のまゝ[illegible]の[illegible]にやふてぬから
いてその夜は[illegible]千夜を一夜の[illegible]てならとかの
のかまされて[illegible]かりしのなひよ[illegible]通ひて独の男子生れ
さん[illegible]は来りて[illegible]にて[illegible]
許に去名を惜し者は利をむさかしれ利に走者は名を捨是其の名
去の利にかゝ[illegible]の目先[illegible]俊蔭の名
を[illegible]の利[illegible]娘の末の[illegible]大利を得俊蔭の名を
今に伝へて大なる[illegible]日月に[illegible]法使照つよ[illegible]なり
たのつら清て[illegible]の臣[illegible]は[illegible]猿は菓をとこ[illegible]と
誠に利深て[illegible]これ[illegible]右切雀の[illegible]嵐の[illegible]の
[illegible]と欲に[illegible]大利を失ひ身の[illegible]を[illegible]の[illegible]

肴ハ合件(マツコウ)なれバよふれてハ溺上ニ溺ま明てハ欲ニ眼くらみいつをかぎりの果(ハテ)
しなけれバ質抜出(フバツ)の木のかをる待ハなかりけれバしかんけりもせん人なれと
さるあつかひて(モト)徳たかき乱まりて名を呼(ヨバ)るゝ境(サカイ)ニ入へ自ら入へし

十

赫姫(カクヤ)ハ竹の翁(ヨキナ)が拾(ヒロ)ひ上げて育立(ソダテ)三月ばかりに人のたけ程の美しき娘となり
まされバいかなる人もやさしく此姫を見んとて夜るまで忍ぶ者も有
をりを見すてられぬ様らへると内のあやうさを給りて殺してんとする人もあり
してい其ハ是といふての遊宴(イウヘ)となりければ是ハ何とも名を立てんとて
のありあれ其中ニ五人の者ハ殊ニ心を遣ひて後のためにとて姫をおもひけり
たくせり翁と此姫の行末をおもひて後のためにとひけるを
たれかハ五人の内いづれにハ是非とも一人を選べきよしを翁ハかたりけれバ
の雜(ヌユ)ハ翁のいふまゝに似合ふ者もなかりけれバ五人ハ弥(イヤニ)増ニ通ひて夫(フウ)
婦となりて果ハうれしきと思へ姫ハ翁と姫ニ口説(シトキ)て其のよし
をたがへてハさらぬもの人をまうけて此の事やいかにと思ひ
たてて世よりむつかしき宝(ヌカラ)を見かけるの方便(テヌテ)をもうけて求(モトメ)ありけると

皆いはまでうちはのかハ翁のてんらをあくまでゝ其後御門より御使を
たてられけるかきりしらん世にも名を切(セツ)ひて御前より御狩ニ出て翁が家ニ御幸(ミユキ)ましま
されけれども姫ハ乱逆(ケハイ)ニとかくされハいとゞ恋慕(コイハニ)の心ニ其年の八月十五の夜空(ソラ)ニ
昇りやまいじへの雲車(コシ)で天(アマツソラ)ニ昇りのぼりたる折から御門へ不死の薬をの
こし参らせて御門ともまひて不二(フジ)の嶽(タケ)よりのかへてもしいて其後是れにとて
許をして天津羅をたりして此人間ニ落(ヨチシ)姫なれバ此世の人のごとくにはなん八
さことうらさ御かへしふるそえあれなるいくへとせん中納言の貝(カイ)とるとて腰を
折りそんでうつハ御門の御ひの病に候かんみて不死の薬を残して

十一

雪降(フフ)んでハ群鳥ひとりいひて朱食(アサリ)風起(シヨ)らんでて釜星(カマホシ)をひろ事
物の萌(キサシ)ハおのれてから亀(カメ)を焼(ヤキ)て吉凶を占(ウラナヒ)ふの灰ニ時候(シコウ)をしれ
されハ定りし鏡(ウヌカ)ニ入るす玄ニ常陸帯(ヒタチヨコ)といふす鹿の速神(ハヤカミ)の社
へいまき嫁(カ)せさるしるし是と親をも男もかれらを受(サヌカ)にんいんを知
らす又我かしさの男ハ迎これらのんなれハ何す花いつハ我とすん

こちなる事や、出来ざる當座の交ハ若き志ひ一生を偽すりハ神の心に合
をれなきの心に取くの男の為一節くの筆に書て神前に備へ
丹誠をつくすの末の目出度えんになれば若さ左りの其筆の取くの中に
一節の書置を裏にて又なりれさを志らに結びより夫婦と成とも右より
今にかぎれ常陰筆の契をとく人是又神に訴るべきて其上を仲立して結
ばつされたる人男の風流にとまりし人をも貧をも嬉しい氏の卑なるも高き縁を
忌しび捨てひとへよかなへて次第と思う人真の中の恙成る也

二十 黄楊の櫛を持て石船神を念して四辻に出て我思人の叶よ
やいなやをうらなふ

辻や辻に四辻うらなふ市四辻うらなふ神

かく三返唱て其辻へ先に来る人の言葉により吉凶をうらなふ是を
辻占の小櫛とて黄楊を若と祝して娘へし此すりハ恋とならに
心うれしと何るべきと用ふべきと辻占のうちには恋にそ思ひ
来る是又神慮の為也私にせざらんかなり

三十 在原の中将ハ竹の園生の末葉にて平人の筋なき孫ハ宵くの関守と
逢ぬとて何とぞとあらん魂をこし世の流るゝを嘆て時かれの瀬なさき武蔵野のぬ
すんでいにつて惜けの秋と二夜ひ泥言ふ大神の御杖代となり
てまゝすの鳥居に朱の月血を為し給ひの道切と取為にれ妹
の方草紙あふきとして人の結ふを嘆しきぐ何とかは人へ惜
しかし女に髪飾の下社に祝はれ
ありいける神代のことを立出れは有る寿なりぬ
此君の宿居の比翼ときこへめ心もいかなり男の其比れたる女いそ
情なかりん男に於いてまでしきかとふ出んを便なきを識なる葭
物語をす二人の仲の情をなる返答ても及ぶ三年なる子あらんをいへる男
と出来と合せてまいたも女有ききてこそ畏人ハ情なしいとて武中将になる是
てかれたる心なかる持し事の行合て道すて馬の口をとめて鞍
くなんぬとひれ心うきなれて来て寝よなる枕と男人へさらむれハ
女男の家に行てかいより男の方のふみて

百こせ小一ゑたい以ていとうん四ゑ成ちよらしいちのまあよ月
こて出ちりきさとんて荊蕪よりをて家小来て去所を男小の女れ
せりまる思ひて立りてられん母なもあきて寝ちて
ちむしりるこるとかしきこるひやこひしきんへりてのくゆし
生涯ち者成男ちられとこひ其夜寝よりう世中れ例りてちつを
思ひこいなを八思ゑ女ゆを式人八こいなをとあちりみもね心ん育ち
評して曰今時花皮ゑぬくりて譲金ゑ脱ひやと指家ての役者学て
なゆう性仮八物金の斗新恨乃ち巴仕ケ小人戒ちりくゆと物
者物ゑ味噌流衣裳きうる厚髪ことう持九指家と直路牝仕猪
と三帝う京ちりりて業平と殺ちう馬の尻返して母のこひを偽
三盃の数ち二盃ゑ減二ゑれ弟う三ゑゑ酒ち次ゑれ意疲ゑ
屋命と行ちく除と義孔新して接口流れ意ちあちんくく流ち
後さち行うれんや鳥羽玉のゆの夜ゑ後て寝ぬ又ゑ指ぬ
ちんて荊蕪ゑあちう八二人の群ち遠京乳ゑ浮世の河ちを思ん物

京西河ゑ紀是仏きられ縁のちなれい結ん神と来のせるみうれ
物ち十寸焼ちゆ京のゆなゆ成て一人のゆゑ明暗を私ゆせちう天道
のん母子ち三人のゆに三ちんちりとかのん使紀をや

越前守為時ち女式紀ゑ公ち作いち紀石山寺小籠を湖水の月小紀戸的君
の巻ちうこんりて光源氏の別れ葉西ゑ浮沉しかこち巻ちれちる
使ち申ちて申一西白紀ち六十帖ゑ書ちんと夜寝の帝ゑん成ゆて
匂神ちき物式をれゑ似ちるとて農君小ての不屈を蟬の作法恵
ひの大ち成明石の栄雑ちりきゆ月夜の細長ひちと光小ち紀寝
なちの元ゆしん採物小ちの河のきれをりのゆゑ花ちんちくゆちはゆ元
文小ちと紀世言成と八糸織女の河ちせられていとこんし極れ
大徳ゑ一ん三紀の血脈をちあ色香中乃の物ちちうちれて中ゆ
物芸ち天竺の警蛇月震上玉泉の水ゑ飲ちれちゆて和
明の清海ゑ紀ち式紀ちし孫の朗ちる是を為ちんこしれい蓬
と京ちと京ちと京ちと深く探ちる京く性八一見ちあせる海出ゑれ

臭體なりしに仏縁もわたらん一水四見ハ、これをもて浮世の浮氏供養の
廻向発願の文、句々に行ふて七数の舟にくだん又淫酒の二ツよ多くハそれて皆く
くひまじりて我歎の魂よきたへて笑ひく其の桐壺のつゆくわかりかぬまし
きに糀えて子孫を極めて生害せんとやはてきしとんハ一夜もろく
よ皆ゑ侵て身ハ空蝉の我見ハ皆な色どり夕顔のさかえうつろ白
うなり花宴の花ひらく末摘花の末かもめて橋の冴よ鮮やかくりし春
添ん没了のひしく榮枝なれん紅葉の災まで落葉と椎の
松浮身足ハかけるの夜く身きて玉かけく柏にも胡蝶の舞
口くへ横笛とてもしての初音にかくぬ篝火で夜夜く蛍きくちら
人ハさまよひあへは夢夜の唄に口ら目あれやうゑく鈴むし葉のうき
えしいつまでとさめぬハ破家のんでしなれ

源氏　孫ハ孫ハおそれとさらむじ下聊の袖も枕に梅の草の雪の代

姫君　かの(き)ゑをきて孫ハおそれはいうなの草りれゆかりのすらん

一冊ゑまむすし聊のひろき意味の雲ゞし八式は葉ゆかりの種

かのふもと花の上ゑかとゆみゑてあのれの外道を今ゆてとすへの
情ふのこすらん

釋の浄蔵ハ十三の歳ふ平日かけ才三の険者といわれて法の驗を唐土
作へすさめるふ七淨懺索ふて曾て利欲よふれ聖徳なりし尊
猛威大丈夫ふてとゆしくなり十六の歳巴國の志有て中國よ立ち出雲國
よ到て杵築の社よ籠りてよ祈りを十月の初諸神、出雲よ集ひ
まひて六十余劔の男女の縁結びをきめんをみて面白き事に思ひ
まつ耳代かゝ我もあゝよ其國の神たち我氏子の才能年數のまへ
てくくよ女よ男を定め其藝小交く利益いまんとなしけく
て山城の國と聞かハ我右郷の縁組志かくくやりんとんと
思ひしかよ年の中奥の娘ハいて約んと有れハ浄蔵小嫁
てとゑしふ結ぶをこハ思ひしれ我本師の誓を嫁を浄蔵の礼を
こえ思ひ卒に釋迦とかして本意なくはかやきなうり下向しすく
よ都よ帰りゑふよ折うし大内より召れて依本の流とよ二三日逗

宿りして八葉八くるふ小女の浄蔵を見て因とし礼さつ志を毛情
のうつて去りさいもんさすて茶の通ひ出るて浄蔵の若さ術
をいてきて去のこねるてい祝の盃をとり教さ（ま）浄蔵すいやか
雲の口示現ハ是ゆんてし孫たきて懐中ら細力をたし出し件の小女をたて
叶さ殺して内裏を小者出て二十年来教ようたろ神を祈せて紀年
の勅願をとあみ神人よ助あれ指ちゝ川を渡り夫術汁変天下に
なりひちき法の験を施し治へかくて父母の恩しりうしい都より海
ゆ小ゆ一條の橋ゆて由家義礼ゆ出立ちたしたをみて誰（を）ゆく
ゆ行ふやてたに移ゆ八三好清公とよこハ小我教よこと変てれ和也
来ると為る彩を祈せんと、ちゝ八ゆ也いて天帝冥府神ゆ訴ちゝ
命をた受てんと椎をそて念誦しゝる底て法命ゆを去たま
て完よかてゝゆ其橋を戻橋て今とまいくきこ（ゝ）しハ上といな
く崇ゆて内裏のゆそなはたゝ法小ハ何とて妻を行見て亜れ
移をたせんとて病この口伽人所具のゆ者ゆ川に色ゝ見女ゆ者こゝ

ゆ見ゆ川ゆ其中小ゆ見て朝夕の宮仕の怠慢成ゆて行しゝ
拙ゝ成て行かて二人の家儲ゆ布施故尾の氏今小ゆ式附され
麻呂肌ゆ行ゝ小女の乳の下小大ゆ底ゆ是ハいふと為ゝ人ハ去ゆき
附俗行者小教れゝと祈りしてゝ小を拙ハ化生れ縁ゆと志ゝいゆ
ゆ行ゝ其後ハ拙の塔れ小ゆて行ゝ行ゆ祈ゆ出ゆ
れゆゆ二人の子供藤ゆ出て鴨川の水ゆ出ひ特意せれゆ行ふ水ゆ
由ゆ祈名れん拙小て塔ゆ祈して一夜祈誦去ゆ暁の凡夫鐸をな
らして川とゆ出て来れこゝてれゆとゆ
評ゆ曰一角仙人の首小内ゝ川ハ耶輸陀女ゆ川ゝ三界の独ゆ宿因
とのれ拙小と竜樹菩薩の弓盛戒賢倫師羅什三蔵の妻帝聖の
身ゆれ拙小れ業浄義のいれゆ一度さけきていゆ小ゆといやてい
れゆたきゆさゆ是を他生の縁とゆれゆ行ゆの出色ゆ出れ行ひ
不侍小て去ゆとゆ、ゆんゆ来てゆれゆ塗ゆ出ゆて化生の縁こハ
是ゆ来ゆて涙ゆ流ゆ今生てんれんゆれぬ一えせの報

とハいひなし祠堂の金まて費粮を法師と教と一口まゝ分神ゝ
仏見をさまれ眞如をせんとうて性をいたゝくれんまとりの境ゝ崇伝
首図こ不こに邪恋の神ゝ
なす是伝ハれてゝの馬伝なれて唐ゝと和朔ゝと其例多し仏
法の威力たゝるゝ物ゝ玄奘三蔵の侍もゝ智嚴禅師和朔の
役の行者越の美濃弘法慈覚慈円日蓮ゝ知て彼海河を法の味ゝ
（ゝ其元由大覚年尼尊ゝ鬼子母神ゝ女人右猫の酸を人の肉
ゝ志ゝ花ゝ手ゝ水ゝ花ゝ天俗のいひゝし然巫のゝゝ合て其性とゝ
多ハ女をゝて毒蛇の鉢ゝ人の半也是ゝて人の鏡ゝ世のゝ
らゝ見と方邪ゝ法ゝ牧ゝ人ゝ邪を変ゝ守護の霊神と成ゝ毒蛇魍魎と和河を志ゝ武
所の上ゝひゝ今と眼ゝ貴人ゝ人ゝを性ゝ伝ゝ役人ゝ貴
親と性の右ゝ出ハ彼人と配ゝ
す彼眼と性ゝ

の首をきけハ人をうんそハうゝ弟ゝ成て池のゝ
ゝ方と
ハ志て其中ゝ也し変化ゝと衣裳ゝ蓋物ゝて人のゝを異
ゝ記ハ内ゝ行ゝ緋の二布ゝ内ゝ行ゝ魂を有頂天怨
ゝ也振袖のゝきて襟の赤ゝ色をゝ伝ゝ化て汚ハ
大ゝ行ゝて雲連の電水を喰口舌の血気を吐て借金とゝ
ゝと首ハけゝて彼屋ゝ行ゝ有情命を苦ゝ元ゝ
収階者ハ潮待者ハ商ゝと古人といひ居のゝ伝ゝ石亀ゝ亀の
殃を求ゝ生ゝ法ゝ力ゝ毒の伝ゝ根ゝの家ゝ極位粹ゝ
ハゝの中ゝ生ゝ粹の族のゝ気のゝ赤ゝ志ゝ
味を伝ゝて根ゝ更味ゝ
伝ゝ更味ハゝ孫ハ仏ゝ石ゝ味の出ハ腐ゝ
きゝく粹とゝ行ゝ記ハゝ侍ハ伝ゝ伝ゝ
是をゝ行ゝ海吹の後ゝ日ゝハ地ゝ男ゝ

者の悔なくして粹なる事ハ敷面に成てもれんすの裏で二ツと色紫
屋四方形なるなり、殆浪五六十間ばかりの長さにて毎日こゝへ
ばかりなるの清爽なるなり、口梅なるもあれハ、なるべくすなる
蔵元の座用きれんす次第に人を使ハまゝ長刀
にして持てひらもあハ袖ハ別れかこゝにハ
なれのこゝを五梅なるなれ二匹目いやなるものよせをかれ変をん
さ海せかなる金箔を程にかゝてせのよ第へ何ものとも分るひつくとに
掛茶屋てとせんたゝ内人のたけすこゝなる所接の三匹ハ千倍養
万倍なる物ハにて俗中と十方第の起ハ友を加振同茶のもてあ
人なれ施ハ三れ〻ハ〻ハ四指切なれ切ハ切ハ正当ふこと当人
ハせんれんなるもひ内なるれ友とるなるのかまり内ハふとう
きせるとなる〻〻なるの人食を殺のぬなこゝ他友なるの中しき
仕なけ是ハ仏祢の誓紙なるなるなるし様なるとなるなる
なれとなるハ天道冥加ハ法さえなる也又なるなる深なるの噂を

ぬけハ家文なるてれ五さてなるなるのれよハ根なるれぬなるハふするの
なれをさ紀の実〻〻ハ〻れの敬なるなるを志ハし
さ紀ハをさ人なれるなれを和〻〻なる也此なるよ人なれの根性
ハ〻〻内なて毒ハふハ内ハのかなるなる客をなるよして情を待あ
ときハ内〻〻なるをたらなて、なるれ毎なるの分別是よかるを
さなるなる不後ハ〻〻ハかるふなるさ毒なるのれよ第食のたなを之
し紙をやなる四をなる毒をなるなるハなるれをふなるなるなるなる
かなる新なるなんこハ〻〻きもなるよ三毒ハ志なるなるかるのな
ハ余の客れ客敬をなれなるものとかるしされハ〻仏を起香
なるなるなるハのまかる粹ニとと沿よ国なる第なる又彼毒蛇を
志川なるハ滅の一字を外なる彼なる宝敬の滅をんこなる敬なる
敬の反なるなる宝敬〻〻交合ハ絶よ意義の骨法をなる合法
内れ丸物なん内ハ行なるれなるひなるなるれなるれ

○二之巻釋教之意

一

恵蒙昌作られて三千年前の鷲峯高根の雲に月況たるを
恵なり五十六億の後れ暁を待て竜花の葉を開しと恵なり
鷲峯の鶴と啄を呑まれ狂の猴と毒を出すと云
なるべくいとて恵也煩悩といへば恵こそ男女の中こそいつ
なりと嘆まし其中小男女の交りはたるべきもふして百姓
悩の酒一恵蒙可笑の根えさる也遠ふ汎ハ一生を行るべ
なすす他生曠劫の紐をとなる是まるて其誠と至て法し私の
情より四年れ三途の業道の波れん一蓮の業となる云ふ者ハ
誠ハ法と云て立又私の情ハ私と分せて長恵ばかりれん恵と和
てなるべふふ云ふ云て云ふんて恵ハ内と外と二つ分て表をさん荘ハ内ふ恵を物さ也文を学ひ
智恵を磨と心性の実を悟る小ハ行て只一乗のかたりのみ小用ふ
のれ智恵のハ也れんるの人ハ智恵をもて己ら恵をとし
人を惑りて、ものれの身を亡ん云ふ去徒ると吾を滅ると外側

恵を怪とと斗思て也て人を防るるの上意さ人ともれハ
しとんること、なれ丈自分を知しハ黄ふ深久く正く陽のきる也
道の巻を勧くハ其れよりの右小行きる也紫の朱を奪るを小くしハ行者
をいやれる也大俗の大智ふ婦女の仁と是ふ仏ふ云ふ善恵を
さ也ふハ肉眼の守りて公道違徒ふれれ立て道なるれ刑
未さ内ふれの大外をんて、て来やさんと云ふ内の恵智とも
ア王夫をたの子を皆人欲ふ為私ふ云ふ眼前の利をうるを心
分別ふ公業中と直て得ふ云ふ道ふハ行て邪也邪ふ利を
得て何を子孫の後家ばれん又今生一旦の栄ばれ云ふ来世の苦報を
たれれん大冨ハ天の与ふ云ふ云ふ大ふ云ふ家ふ生し長者の子と
なる者分別公業ふて為ふ中れハ行ふ也去の胎ふ長人云ふ今日の波
世の業ハ身ふ恵して敵をたれ人乳力ふ内也精を出て飢を寒ふれ
ハ是ふ身ふ身ふと恵ふ業を是非と云て一仕ハ人ふけて成ふ云ふ
ふ云ふ云ふ乳ふハたる人力業ふとせふ分別王夫中とせふ身心疲て

病を生し天年を保つべからず天年をたもつと一生忘れけるなる
へつらひを慎み常の身を明らかにして身を守りしことハ此事也
欲にハ頓なし十六夜の月の欠へる事を惜しくもり十二十四の東よりて
出るハいつとなく及ぶに余る事有ると志られハ恋慕も愛執も
着もなれん迷ひに執もなれんとするハ執と着とさきにて恋慕も情
を捨へりハ此道なくして一日と世の中にあるものか

二

小野小町の事さらなりしなどハ兼好と書り艶色のたぐひなく才智広学
の性ハかりう侍て世にもてはやさるゝ也はなはだしく名をとり智恵をかこり
身をたかぶる慢て彼方にも玉章をさけ方のみもなさしてあまた年の恋をへ
くのよきも恋の為ハなげかれても其流にあはで過して男共なげきてくらひ
多く極まるにひなきをもてあそびなきと才智にほこれていひとりてすら深草の
少将と云極なる嫌ひて恋死せしとかへりみもせん為にして業平は流石
志ハ男嫌ひなるによりてきらひ色ある人の為にして惟章をいふなり
て我のすゝめられしを夫の科をせしもの深草の根をたへてハ
身のおとろへてよるべなく秀康にもなれたる也秀康も通ひける
ことすくなく思ひ汲みて合点なくしてかはりて行けるにも我方より出て行ける
とのみうらみして路のほとりに鉢をかゝへしハ誠に乞食の身の
あはれなし今とせよ猿かしこくて夫をもちてあはれハ男をさき
ちふたりの後々にかへりみすなれ也かくあられとて小町の
醉狂の果哀とや思ひしも白粉ぬりくらして小町の湯
と云し地教よりしも彼方へすゝめの合湯を知りて縁を結び五湯の風成
これ三従の道をも忘れて式部石上に遍照あらと聞て
石のうへ旅ねをすれハいとさむし苔の衣をわれにかさなむ
といつて遍照のひとへをかりて苔の衣をかされど同じく遍照のそばに
捨たる身にもなれハたゞ一生を旅ハうそしいさ此事ら惜しん
かと流れのひとるよし此遍照もおそれなる道者成しとんかるんなる者
多かりき式部内裏へ参りけるに今宵ハ月と出くせさるき酒の肴
なんとて此うちとさ女房たちいかせつるよ

女帝花かやう郭色小袖なる花ゐくいけれ石色ゐ川(き
とてもあちく由くんとすく成馬の内侍
花見(ホ)ゐくこ行ゐ花をハちりはこときあハ波を川とて先川
遍昭の哥ハ花見よ郭をちかれん一夜泊て行くちりゐを我ホのこさ
とふハいふとちく腰さてれていや臣長の葉とかくハれんハいとハしこの
下ん与枝ちる也内侍の哥ハ行こ成いとんの花ようとれ人をとりて
こ行こと行こ花ゐハ投也花よ命と石と拾うんさこりうん我とこと
ちこ夫の葉ちこハ浦花よ志作しこと川しこと川の恋こと也
詞よ云恋とうちうんかくこと今附の人ゐ中をこと又根を物川ゐて未
こちゐ黙乳よ花の立ハうちこと也て女ひよ神を西ち合て見ハいゐ
て行こふ物の人ゐのいるみ男ハあ〜うぬ也ちなうの根ハ物る
四うて徒てのと接こ川ちんとハ大猫の出合ゐ川らふ交合のこ也

三

王餘魚の汁ちゐちうとひうう西況の栗梨と物ハ自然のゐうめ
西して芋物のふうう花をこて成たんすれるゐこ身(きるき俗

れりゐの人南都の京春日の里よ家老よ成主人主ちうの妻ハ長
者女て官位ちあれ主人のうゐ西ひ出入多て勇らひ主こて奴婢と
ゐ者もちう式長者宮ち主ちゐ家ハ有こうち樓を指春ハ
恋の傷よ対て海棠し新を水きこ日ホ行うひ秋ハ西の豊の月と
変て根河の出ちふ胸を行こふ孤華の衣冬行てこふ氷蠶入
羅夏を主す食ハ山ち細し川ち汲せて日こた味をうハ何ちひうう
とこ行ちれこと男子と女子とちとうを夫婦のちゐきこう
日況ち南園堂の本ち成こ成ハ年ちこうゐたゐて行こうゐ
ち成こ成ちまこ子孫を投拾こ孫ひうふ一人孫ゐ成こ常
怠茶敬ちこうちんこ心怠不空の況行こゐして拾木と花花
芭眼花生の雨四津孫ゐをうゐ行ハ拾把ち実ちゐを主ちて
まちこ川の年ち婦ハ行ちこ川ぬ卵ち花人海ちく一人の根をちこう
長川の拂拂ちこ成こ成ちこ月日猫ちて云分こと
肩ちうまこ生ちらぬ市ふ物ちうゐ拾ちゐ四こ成ちこ兵ちら

のみならずさかり立衣のこしとおもふまに袷しくひさしきなりぬ香(カ)
折(オリ)のんやさきる花雪をわさむしく肌(ハダヘ)ハ未向(コムキ)に眼(マ)をふさぎりたり
これぞまれやとおもへるほどにさかり立し小娘ハ人の袖引ぬ潮に浮てな
らげとふかして其のはさへかしこて我に人くわしくおひて京の山路に
立迷ひのかの住ちなハひそうとせしこれぞと父母の教にもれハ窮屈(キウクツ)に
御てる気たちしこれぞて月日ハおくりかり家に其家の分でき伴老(ヨトナ)の子
に十娘胡父母しく物いひかてハ如さうてまうと立申せしひさきの
ぞ今に肉外に孫でみいへと家と関入せ彼まつものとしてハ白徒
の礼をおんみて天(サラ)にんとうこうきうもかうらてけてやんとなり泥海
にきれしくもの元の界ハ我れとれんらぬよひて今ハ罷と難(カツイ)と何かぬ
人にあきれてさむかしに一夜の枕をかけても契ハ人目の忍ぶ文収表のうちす
物のこともと家べしき奴(ヤツコ)なれん身すてよきんよおさしみ知万ちん
いふさら我を彼らの妹背(イモセ)にもれありすにハかりし花さすからら
身にそのいまんとなかつらしくさやくしてなりくに種にゆかいろ思ひく

かゝる痩(ヤセ)て彼らの恋のなげき同じ人にも身にこそつらき式附妝立より
いづくより到るに思ひもえてしといひし行る情の道高卑(タカヒク)なかれハ世
俄にかハりすまるとは此時と宿世(シユクセ)のきふしきやいひかける人
ねしなれハとといふせの人ゝ恩のせんたれてさを二世とちん思ひり
おし今御て取れそらかゝらふして万奥の事ハ小河さまの船せ
のひさふれ伴てんと三とふかうしありて寿かハし今その彼こそき
文(フミ)のなに入てかさやふ庵へもかうんによる御佛の法の恩をたのう
ほかでかハれを結ひさうてなしん様の世又後の世かけて未の行ち
きかまなたんとの夜ハたりまき彼らにやさる事なきしとなりてまるこ
ひかれなうこゝろうし学文に夜豆弟抵女を忍んせニとして寝食(シン)代
まかれてはとろ瑞(ジヨメ)しみのの明(アケ)の年彼妃悩(ナヤミ)しき風情の其へかり
り七日の間にゑらすし此世を去りたいぬれの内とかの若(ワカ)のもの
に文の彼ら忘れをかの世すて忍ととのさゆひかりきのへハ歎(ナゲキ)で
すて經論に眼(マナコ)をさらししまうに色即(シキソク)是空(ゼクウ)の教(ハン)成(ジヤウ)して彼妝

八観音の化身なりとぞいふ。他行兼備の聖なれば、衆人の師範
なりけるにて、南京の智定法師とは是也（浄土の鼻奈羅ナトまテ利益ヲ万人ニホトコシ給フ）
詳は日吉長者先の世と福力は有ながら不仁にして物の怪成る性命
を捨てまもりて、永く不得道なりと至誠の信力にて観音
の力を蒙りて、あの新を塞ぎとしられ、因縁にて後生菩提
を又智定は捨て万人を助ひ、毒欲の汚れをもひるがへして仏道に入る
牧荘厳王の前後なるべし。されば八苦と四苦とは菩提のはしなれば、
ちかひにもとづく況世と来世と煩はしなく何ぞ道なきいなしと
思はるべし。

四

雪なる〻ぬ峯の松風、袖をぬらす山陰の名ごり、不浄遠ざかる志賀
の寺ぶ中首朝前上人と申しは、青行の誉世に聞（警策の風に刺の
義を学べ）。洞水の波に業障の垢を洗ひ、本来の心を科の内にて
かしこんなれば、永き六根の肌寒くなれば、三衣の破れ、五戒堅き命
をはかるに、五の風に波をうたれ、一時の求むるのみにて、
とせりにて八念珠をくるまれ、口は仏名代常にして、八十年のまひをれ

ども、法花経の経文は、鶯の谷を出て、春の来るを知り、武門春気鳥の若葉をさそはれ、東風の風なるふるまひにて、禁
をも忘れ、野山の花は人我のへだてなく、なるる物にて、悠然として立居すしひ
をひて蘭麝の匂ひ、殿中に近ぶ業にして、大官人のいと高き位ぶ、
をいかう風流をたしなむ人の名を家土産の栄誉にて、
て興を葺の我らは今拍うて、千鳥足なるは芝生の酒のまもるこそ
らぬ歌舞のさいはひなるぞかし。このうちなるとて是と常なれ
乃ち人は折空の紀をうしなひ、宮は寄せ長笛のかとは車
の翠簾をさしと吹なるふ端義葉は女筋のそうなる上
人のしくたもあなく、鳩の杖は出かて楽山をすしくなる後は、目と
なる屋は折笑せるの新さしく上人とはくるんやうまつ遠山はかして
三日月の焦秋の蟬し、霜はかりなる函賀大波の美蓉の新は水流ん
なるくもりし羅綺はくとしるは姿をもて世を忘れ、なかて石鮮
天をかうこなりかと絶とれなるとこれなるとこれなるとこれ
をあはれなるのたのもあるぬりの仏体よむ人はかりし姿をもんて毒欲

の水に智恵の火を消され執着の雲に法報の月かくれて何事とは
まよひやすく身を罪に汚されし名はよからぬことを未来の悪縁を結ん
て呑しくありがたきを思ひたまふて妄念をはらひんと思ひ立て
御息所の庭に参りて聴聞とたのみまゐらせんためを知ると心得
しかれとも物は悲嘆のみ帰るさの胸をとりん合しぬる程に御心
出でなからずなり果てにけるとかくは身にて翠簾に近く法と後に
て上人に向ひしくは申されて
初表のたよりの和なるは前にに覚かしは由き玉の緒
御息所
極楽の玉の台なぞらず慈悲に衣をいさもあ人拾ふく至るのせ
と御息所ぬ女に安かりあら凡情をむて正覚をえへてえくしかよ
ありしことひかへりて
評に曰顛倒せられ獄卒杖をあて発起せられ聖衆蓮台をかし
くいまし肉身を捨てられ迷の海を渡りて霊性をなり

られ惜みかなしみなからん首は必ずひと向ふ仏を念じたてまつりし惜みと捨てから
心に実を以て思ふ者の今時の僧徒かく迷ひをひそみ惜みなれども尼みな
内は穢多て上気にたぎり衣装はかけつらつに又柔をはかきない
か清らかなる賊となりて内と外そせん裁断ならしまず内の首を
ましん空也の教に茶筅売も坊とかゝる念仏の仏人かつて
ひたすらに念仏かけ奉り鉢叩とかくて唯修練して道にいたれり鈴をぬ
もみて耳にかへて侶として味て罪をたかぬれなし

五

書写の性空上人は法花読誦の功積りて身に六根清浄を得た
まひなる我時は観念の窓に法の摩頂を受け讃談の庭に聖
衆の来臨を拝ましき人にはあらずひとへに出世の利益を
れん今と仏菩薩の世に来りてと業悪の元とをもひ凡夫は眼
去てえらる我六根の清きをもつて何とも弟子の為に
て直に生身の普賢菩薩を拝まんとて
示現に生身の普賢を拝まんとて室の津に行きて遊女の中に

しこと家科せよとおもひさたをうけるひ文ハ立ぬてたひしへき
ものなる金深の所ふて拙女よりはんとてをとるとふみを
同州の三宝を供ひ敬を信ず座りて室よりいろ共に密の石
五石をとりて西の方今拙女いつ善法の花しをふと偏月を
て守りるとさしてかるる海とれしのころんやうにそなりたいん
サラ波立やまコスントふ蛾るれてなりて上人ありてみのひて志ていく
月をやさきてんを潮しるへ一の産を優し拙女身ハ紫磨金
の花よりるにかを指六宗白象を集実相法海の大海
五蘊六欲の風ハふるとと仏こハいふと信ん助まてて随花
の洞を西るす如月代ひ者ハ拙女りサラ波立の奇せき
月代をれを客かるるくう渡る剃てて根せるる色又孫
る流せふをさるるの山誓むるるるるる五縁結ってるるるて
又こを行て物ん上人を求して洞を神るせるるるる別を出たる
上人百是をうとあをるれ拙女ハるるたる渡るるる色

伴をるく伯樂ハて千里れ馬を求ハ今迄先りを待ちて
し有生れ世乃交りはしふうれ交んと西とを抜ひ俗をかの
西ハ待者ハ待るるて雲ハ晴るるて月波暁ハうて花の風海の月仏
とるるを慈化の広界ふとに雲ハ実風なて五波なれや花重
云のハ候月代れ暗と聖を恒よ花ふ多ふくしこ
き巧を上人を見代るれて又異国の弘誓ふ代るるう先の
絶るのいを絶ふいつまるるる西るく今の世をといふ生死の落
壁ハ西ふ海きたるるるる遠ひの雲尽く又先の世乃縁りくるる乃行る
ふしぬん上人の黒衣ふて拙里をとるりるふ中者の律縁るの時代ハ
衣ふるる人ハ紫屋と揚屋とうるもの四及事ふこをを代ハ姿をか
中ハ加んるるるるて紫衣ハ袈裟ハるるる魚食ふいるる仏友よれしさ
世をとるるを枕絹の篠代るるるふ西永海屋を体ひ法衣を油
代きるる二布を稼を持花田遮ハ何るる海しるんと下墨尺を金く
卯を広しん成庶くを西を行るるハるを只耳を論て口を吐悟識

と成愛かふくまくらを高て渡世の色性となりの也寒山拾得ふ
唱せられん四豆なり寺号を名乗へ一向を俗出る者ハ名のしの科
のミ法を弘て人を教へなり不法成なりハ盗の中に盗なり淫毒
濁世なれハ禁戒を破り仏制とていましめをなせり宗風をとゝ
ゆに祖師の掟ハ寺て人のなりを死世を面とつと事を慎めて
僧侶を人の物の内ひを去を恵せよ

六

唐土或法師虎の皮をかゝりて人をたゝ[illegible]るんたきて山賊と成
虎と名せて追くれ[illegible]ハ其皮身をとゝ[illegible]を共の虎と成りを
醉狂ハ袈裟を[illegible]外道仏法を悟道の智と勿
らく物ハ因縁をひふて一人のうゝ面ひりを智ハ代ハ
何の律師ハ道力堅固ふして人のうゝ面ひりを智ハ朝ハ音羽山
虎ふ後鋪の[illegible]を[illegible]ハ一々へよい三の滝の清きふん水の月を
みるきて三密の法とあこ海やふ八正の道たゝく妄想やとゝ[illegible]世を
を捨ひ善根の外ハんよそ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

萌(キザシ)なりと知りて小はなはだ物を折伏して「四衆」律師を記録し
仏道日新き中なりと志りて法師のいとく一念の起りを西方
浄土を業とす弓断惑の利剣を用ひ生死の因縁を引て仏道懺悔
し祈りて弓く念仏をひとへに中し意心を安んじ志を西方に向へ懺悔の
妄業をすてとすられし名ハ其の時に信者を化せ文
弓れて大内山に参り彩命婦のしい海に二八の数ひまして宮ハ八の宝ハ
れとくて文さとりて志ひの間に沉こて深にて果のん我ハさとられ
小ハ弓今さを毎ていを色まを不結志れ命婦を礼こと是
まを返答して弓弓自仏師の病外る床まを孫う額をなて
疑をさまをて いまうなるなんさ礼弓ハ弓ケ礼ハ
を礼まてよ弓をを弓なるふハ十年の仏師起を弓りて
念珠をくを弓八万余部法し法花経の夜寸一の文を八万ふ
西弓まを佛を生弓拍つ関白摂政女を生弓拍つ后女御佛を生
拍つ大佛ふをといひて絶入ぬるのら式命婦宮治ぬまれ

東極の摂政四条の殿文三年寺の栄華座主を産生ることなん
評は白泉涌寺の我禅の帝位まれて我う寺を勅願せんと
形ひしら代れ御陵ふと成り京ひ金れ多年の沙業ハ此殿の
一念まを弓弓色の教を引まさ西方浄土の様ハ法師のつ孫く
のんさ一人間青酒の果報を形ひうとる又式人異乃外ま浄土を記と
明弓ふまれ出んとを毎ふ弓まるう志の悟ることのう

七

道明法師ハ右大将乃経の息なりいとをきまう日枝の山ふのう
形密の学ふ八弓対ま法花を通ま弓経常ま不作ま寺共色世人ま
を礼てひき糸節のうく悟く清く弓れうの呂律なとうく倒ふ
実者欲日拝来となうを礼弓是ま弓礼て世ふ持通年一の誉乃ゆうき
志弓ふ天国ふ弓く歌うハ弓礼ま大内山の志さ弓ゆ内仏女官の志
を世弓志さハまるハ弓礼ま弓い海ハを寄ういとう心をうこう弓
の法ふを志を海礼弓る式附和泉式部の志弓ゆうう海礼弓ま対ま
学ま寄ま八弓く志ま志口寄のいま記ま記ま不学ん弓ゆ弓て一夜ま

拔よ千世の後なりと給へる其夜又毎のごとく法經せられるふ一人の老
翁の布衣をきるる来りて其夜ものしるを独りめし酒肴の饗を施す事不
心後まで絶ずと問ふ人ハ柴ハ五条の天神とそ申ける名明のいとく我後
絶ず十年悔り給ふ一度とも名ハ今雲霧ハ仏の名号
多人ハ天神の曰公ハ天下無双の通経者也ハ常ハ梵天帝
釈四天王ハ外寺護の伝天屋の上座なる是なるとして我の名
小神ハ面をしるるとかいを今雲霧深き西の御稱て法天魔
を祈り其陰をうるへ拝系せるとれ久るる是名明ハ
禁戒をたるる精進堅固成しるめ
伴よ曰ハ和泉式部ハ和歌の徳を得て人の口ハ上高多く或ハ鬼
神を感せるる又たまき武士なるけ一るるぬ名人なる彼ハ
物のかり来の代ハ河り今とるの着のちかしかのるきハ我身
ハハ行し去なるる俗を河部さんとするる後と書写の性空上人ハ外
ハ六根清浄の名徳なれん和泉式部の事成きるして今日ハ鹿民の

よ是事の日ならて口宣を用ふる
今きるるらきなるなるなる

うつしきよりてんかのきこう物こゝろかなしく侍りて道ゝふいけ水
とゝの国立ちいたりひとり者と出きこうゝ行業信敬の真を
切て世をすてゝ明恵上人の決着を思よりてゆひとゝ文雅こゝ
て人の心ゝとゝ尋ねんのこゝろ

八

慈恵僧正式叡中宮の御方にて三帰戒ゝ八斎戒梵網の菩戒よい
ゝて春年滝のこゝ言葉ゝ玉鉾たゝ行て侍立ひとり若信心肝
まこゝろて随喜し給ふ翠帳の内ゝ
有漏地ゝ無漏地よりゝ歓迎ふとゝ底唯羅の母ハ上てこゝきゝ
ゝ
ゝ
否やいなしきゝとゝんきゝ家れ候ん一たひ前さゝゝゝやハ
ゝ返事よりて法名立ゝして大師勧誘の誓状ゝゝあり吉水の和尚
我ゝ立ゝ表裏たゝの深ゝて内ゝ系ゝ風さゝくゝゝ
と法せゝひて世のゝゝゝ

あるハ我ホトケ[illegible]ひとのと身をけていけしきこハ[illegible]
らと先の世にしなきものとあれ[illegible]又さ[illegible]ハ是と
首の敷[illegible]花の枝[illegible]
なりも唯[illegible]の[illegible]
法[illegible]
[illegible]
[illegible]

いかゝとさ奇のんなれ感よひしれて拙女の我の石の物をいかゝハしらん
其代造ハかゝふの星ゐと仏行者を宿うゝへとぬしゝ未の代
の首拓六十六部の盗人の手引神仏ゐり干物盗とよなふをせる
ゝなれん波世の生業品の油門なる也へて八歌うゝ代ゝ
あさ出ゐて麻を織と盗人とうんへて八人のねもあれ衣をいかれ追剥
をとなすせ之千の大鬼と唾を吐よ陳なるゝ

十

紅花の凡敬貢葉の色よ務ゐ盗ゐ物の変へる世のちゝひ紙ゝ多
平相岡の威天下よ多ひゝ都の策阪よ牧丹を指ゐ多を清
盗我の花ようゝ植て外を物ゐ流ゐ多のひきゐ様の牧女も見ゐ
ゐ古花の殖よ出を世とかれゝ老入をゝて余仏の藝者と
ゐ多牧の安八世の美附勢ゐ多ふて牧猫牧徒をとつきゐゐ多共
折物ゝ仏の花とゝ茶拓二八の年のゐ多ふ変ゐゐふゐ変教道
八ひゐゐとゐゐと道理我なゝ六牧座百ゐ花ねゝ卯ゐ立て外を
と裝束ゐゐ化粧ゝて玄関よ住ゐ夜汐よかゝてゝ人ゐの清盗ゝ世

八ゐよいゐき言八の名世ゐ名ゐ世ゐ八ゐる意ゝて来ゐゐかゝて志ゐけ
ゐゐて名ゐゐゐゐ名ゐ名ゐ名ゐ門ゐ邪ゝ遠ゐ世ゐゝ捨ての花ゝ牧丹
及の仏神をひゝ人仏八ゐゐ及ゝ世ゐ遠ゐ世ゐと藝を世ゐ変ゐ八ゐ名ゐ花を
ゐゐゝ何ゐ名ゐゐひゝき一ゐゐゝ来世ゐ流ゝ世ゐ遠ゐゝ世ゐゐゐゐひゐ
ゐ世ゐ八ゐゐゐん名を名ゐて怪ゐ名清盗流ゐん名ゐ末の花よ礼を言れ名ゐ
とゐゐ名ゐ流ゐて仏を名ゐよゐゐ仏ゐ来ゐ拓ゐゐゐ来ゐてゐゐくゐと
遠出ゐゐを牧丹ゐ花の情ゐゐ名ゐ遠ゐ名ゐ名ゐ藝ゐを名ゐ名ゐ平
ゐ性変ゐゐ名ゐ名ゐ延ゐゐて名ゐ名ゐ名ゐ名ゐ名ゐ名ゐ名ゐ名ゐ清
盗世ゐて相ハ仏ゐ時宜ゐゐゐハ牧丹ゐ小遠ゐと遠ゐゐゐ牧丹ゐを遠ゐ世ゐと名ゐ
ゐゐを名ゐて名ゐゐゐ名ゐハ牧丹ゐ奥ゐゐゐゐゐて真ゐ宿ゐ人ゐ帰ゐゐ仏
ゐ一間の清ゐ小一業ゐゐゐ牧ゐゐゐ

萌出ゐ拓ゐゐゐ名ゐ藝ゐの草いゐれゐ形ゐ世ゐ名ゐ名ゐ名ゐ
真仏牧丹ゐ方ゐ名ゐ信ゐゐゐゐ仏ゐ牧丹ゐを名ゐて

仏法の為に今相うて人と言
こゝて云ひしことを世のそしり歌きゆへ其性を是非なく彷
かしてきれるかの云ひ世濁世を流俗の山雲やしなを妹の好
世のそしりと同しんの法のあり所
の法よりなり陽よ成なるれる
ハ小車のめるこ今の見れる卵
き世のたとゆ為ゆ人と生れ来てたりそるき川竹のつく
かるる夜の内こ流れ流の後れ是を言捉の云ふ事と流涙ふ
たり仏法ならとなるれを来の世のたり
弾よ云今世の言伝或ハ妄の性を
よたりたる秋の卵を卑いてすして
てと情こ後と内後ゆの言かあ言ふ
いゆるれハ男ハ足よ流れをゆうれ是を流とるひちしうり妻を
せうこ立計のる人なよ相とゆて一言いハ苗物きていつのてしま

ばのうと三行よて遠うを云うゝ如房し泉宗と縁を切こ成
幸よ所美焼う事を嗅て男ひてうもせぬ世ゆうこゝ中こうあ恵の
縁よ言ゆき牛よ馬今の男ハとことゆ恵ゆ
んて、流ゝき恵の妻ハ仕ゆ為して寵将軍ようゆよ京辰三段重
二段朝ハ夜次第雪ゆとひ大京てひて相とうゝて嵐の
塩ここて流ゝ行ハうゝ流よ世帝の大崩これゝハ之と性を
ゝるたゝ拙ゆるうれちのたうとゆうゝるよ流れ秋よかう
秋ゆき楽流ハきれの美ゝとれて大俗の人ハうのてゝう
とうて〆き小帝ゆ為世と云ひう千三の見ひを大和前一首
の中よ相こて仏法の胸の風ゆ照れ石ゆしてを生の仏よ
流ゝてし和言徳浩のゆの海よ弾弾仏楽とハ是ゆ世業柳ての
因位よ基き伯夷の旧恵を忘れし言ゆとかの人面江
斉義尼塔流教ゝ滝口時頼と云ゆものハ小松殿の侍光六
殿尼相の仕世し男鬢今明ゝと存ゝ寺馬帽子の云ゆ

ゑんとゝ早馬をてちひいて何やらさゝやきてと二番目へ立ちなをれば
ばるゝふこゝの中宮ハ小松殿の御娘君へ日毎の夜ひ嘆
うゝいなのかのと滝口是をゝ伺ひ給ふ男姿ハ能小利口
なる代中宮よ宮仕ひ女官女官ゝ女官ゝ女官ゝ
こゝと式部又ハ後京ゝて横笛とゝ
弱ゝて牧ゝ殿ハ身ハ世ゝ
うゝ
釈仁せんゝ
ゝ世ゝ
ゝ
ゝ

滝口ハ新ちゐをとゆうる郭山するこゝろ横笛とゆへさ角をとゝくらゝきこ
ゑしかん滝口入道一首の哥をそゝ[illegible]
なるゆゑハ恋しらとゆいさち海とゆ[illegible]入をとゝ[illegible]
横笛返事
なるこゝと何ゆうゝゑ[illegible]ち引そしゝきんち〳〵[illegible]
世のち天郭とゝゝ[illegible]ゑて滝口の古ゆ袖をゝと洗ひ仕立て[illegible]
[illegible]て流そゝしゝ
伊ゑ云茂新ゆ世ゑ者の[illegible]ゆとせんとゝひゝゝしゝ恋ゑいゝゆ
の服をゝん立ゝゝゝゝ時新ゆいゝひゝんゑ[illegible]ゆゝゝゝゝゝんと
いゝしハ時新ゝ裏服をかゝゝゝゝゝ横笛とゝひ以
[illegible]ゆ足ハ平家物語の作者ゝ文流て義を失ひし物ゆ親の下
[illegible]と従ゝ海し横笛ゆと深へゝゝゝゝゝゝ新を弱ひ横笛をゝ
んゝゝゝゝゆゝゝゝゝん新ゝ[illegible]ゝ未と碓ゝゝん者とゝゝ彼ゝゝゝ[illegible]
ゝゝゝゝゝゝ横笛ゆさゝふゝゝゝゝゝゝ

橘は白ひ遠山の黛を変蓍の眉ニてふ花ハ是ハ忘を拾の
使求て四方に傳ひ月言ふ夫うを言ひ不老の果不死の桃ひ
なるよりなを云ひぬるふりの仏又神よりのりて、もりふをらぬ色を
むりいりしふはりの花ぬを桜色をく桜の姿と草ていろうんを想
殿ふ高仕ていてうをしく気色よりをあれ其なをきふ可色さ四さう
んを二ふ是ちあれハこちと同し様すれ石ひ小持以柿なんハひと
色ぬるさうもれ糸行の花ひ物ふてもとたりし事ものりさ
ハ色遠ふのうりぶる月日をかりしよ高貴及の外ほとりて生て物うま
を二人ハ面ら孫松合てよい所ぬるの物言婦をいて一間をういて
る女の数まて物ふけ物ていをひしいりて仕ていさしてを松金
い二人の髪さを〜蛇と変しけ花ひの中ひ喪ひ其後とて二人の女
遍即ふ汗ををり〜今ものを後ひ物ふ人ふてかをうきけをと
て御ふ外西ハ茅ふて門ふハ寂又の角ひ〜し仏の山教ものをを
苦院の系徴ふて鬱を物ふ〜門を言ふ一不不位の仏業猶ふ経卵

の仏恵ふ叶ひ〜一遍上人と作ふ来世ふ奇特を沙〜ふ
仏ふ〜地ふて立色欲の行ふを女の行ふ〜を撫
哀情多く法中ハ嗜欲から成ひ〜ハし蛇と成て嗜合を四の行ふ
ふと宿世の長縁のをを〜き折ふ〜ふ女の性曲ふ偏ふ恵
堅ふハ男の根ふ温純ふ徳を沙て煩悩昂菩提といひし色〜
人をとふ入我と真ふ人ふ是ふ煩悩昂菩提といひし色〜

三十

蛇を懐ふ〜ふ〜ふ女を添外ふ砂を嚙と云て肉を用四
ふ科色と是四ふ人執ふ者ハ境界ハ事ふ四ふ〜ふ四ふ〜ふ教〜
中の〜ふ出家の恵食ふと為見疑の三ふを除て病を愈〜法命
をなふ〜ふて海ふ〜ふ〜ふ件の法の師ふ名徳をの外書成
常ふ〜ふ入恵成ふて後の縁と出ふ数其教〜重徳を子ハ和朝
の重人ふて後ふ〜ふ仏法家初の功を立ふ人西方ふ〜ふ五十果ふ
ふ色ふ〜ふ四ふ十三人の山子ふ〜ハ海ふ〜ふ〜ふ〜

の君主ハ刑罰ヲ以テ上きう盛斯の化を偽ると称ずして
文のふーきをねーと又樂て海せんとて南雎のうく睦れと志
ゆうかハ破戒の比丘の地獄に落ちて法華経ハ今ハ
と滅法界に放逐ちうん地獄に入る矢のうく必ず義に依て言る
うーれとハ仏滅迦葉の仏老言をかりもーいはれうるを沢論戒と
なす若戒と破ーうんとなーん何して名といはんと
十四
文永弘安の比日蓮師出て四箇の名言を立て法華を折伏ーす
不謂念佛禁間禅天魔真言亡国律国賊と是日蓮師の恵口ホ
ゆうに頃倉時代宗々の本尊を失ひ偽法のみうちに偽
今時の念仏ハ阿ー地獄に入る仏ハ普賢菩薩の名字の行物を
見て去ぬ今ハ念佛者と恵を師名字師ると見ハたるを
用とせうんかあいま去ハ彼行依ゆう恵を十八道社に渝其道を
凡夫のふひゆうと一ゑに出念ちる紀を絶て是を除きうる今時のスタ
ドの夜食いかき云う射其道ゆう凡ちんとと及ふいきや偽史をうる

よ名字師ハ海土の三部経を三方約に余りて書写ーー口称の念佛
十万遍を毎日の所作と云うーハ口ーうう三号を吐ハ金色に変ず
千寶也ー彼仏の国ゆうん名ハ今時の名ハ念佛貪求の一万日なりハた
しかし無間ーーー是念仏の恵ハ行ると去ハ佛の秘号を口ー
小ー銭倍の報と云ん菩提の正道ーーー業を毒に用ひて
何の益ゆうんん今ハ人を活ーー業ホきるを用ひるるハ人を
こうと念仏ハ人を殺ーー用ひゆうそ地獄に入何のさいゆうん日蓮
師の念佛無間ハ恵を師名字師法華上人と黙既ーーーーー
禅天魔ー同ーー本来の面目本地の風光ハ口ホのーーーー
妙法蓮華経ゆう経ゆう業辱ゆう流通魔の悪境ゆうん内ゆうの必ゆう真言
亡国と亦同ーー六大無尋四曼相即阿字の一万ホ七花と切涅槃成
仏中ーーーーー七業と毒ゆう用ゆうん法華の秘法却て亡国ゆう
恵果師弘法師と云と毒ゆう用ゆうん法華の秘法却て亡国ゆう
和尚ハいかゆと今時の律ハ国賊と見ゆうんーー無間の業ゆうゆ

念仏し天魔ちりぬれば仏ぶつ表裏ぶし四ちりく
ちりぬれば律を守らいれとも法ぶつして若輩よりあさんかひよりあれば
日蓮師を悪口いとうとをうすへ今のてんしてハ日蓮師の末流法花宗と
十界皆成の妙法法華経の行者我執慢よりおこり為人て法華経
光の如理を叶はをぬ物なり日蓮の法眼を見給へ題目無間の名言
やんぬるべき清信の行者ハ釈迦仏の教ハ法華経ハ一実しるべ元唱題
誠あり誠ぶしんなりよりの釈迦仏の教ハ法華経ハ一実しるべ
更へ乾田の水をかへて其脇田をとと誠を立ていさぬるとのしむ太子の三経
の御法華経ハ記の反作りと等ものとひるめしたいれて半ハ信へられん
心を叶ぬ乾ひをするのをんるなるの中教なり更ちれん釈迦
い法成道て衣をすてしかしらを剃やるものハ貪法ハ修人為行
面を行ひ又孔門ハ法ならるるの人の儒をしさるる法れいさをの名非の
氏人のいとうて為物さるるハひうてて天理よりのへきこハ仏れを仏
法の三世を立て欲の字記ものハ地獄ハ為欲ちれるものハ極楽る

世ハ仏ぶつ四きぶ仏の口美仏ぶう物ちる今の世ハ金銀ちてハ寺う持ぬとん
ハ世欲ぶ知れ元信ぶひれ思人の耳目ぶいちれてん性の法を捨
物せいぶる今日のぶとあハ色と為人を地ぶるとおぶ物ぶ上来
善提下化衆生欠てハ何ぶを行へ仏ぶを物ぶて去ぶ物を他力のな
釈ぶかうていぶ悪を法ぶ首題の起ぶを物ぶとうとして仏を
れぶう仏を物ぶう恵眼ぶ法眼ぶいうぶ四眼融入て仏眼ぶ
ぶいちるんぶ物ぶ四ぶ仏ぶ

此書世仏土の穢ぶちるぶん隨地獄の因ちるべし